

中野渡先生との出会いから

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政経資料センター 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 喜代治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10290

中野渡先生との出会いから

佐藤 喜代治 (昭和42年卒・中野渡)
ゼミナール12期生

私が昭和38年に明治大学の職員として就職すると同時に政経学部の二部の学生として入学、2年後の昭和40年に転部することができた時、職場の先輩の方から大学に入ったならゼミナールに入り一つの学問を探求することが必要であるといわれ、良い先生がおられるので紹介するから是非入室させてもらいなさいと薦められた。先生に直接紹介された訳でもないので顔も存知ないまま入室試験を受験することになった。特に産業心理学、人間関係論、マスコミ関係について興味を抱いていた訳でもなかったが、ゼミ員として名前が発表され入室できたときは本当に嬉しく、先生に感謝いたしました。授業が開始されたにもかかわらず仕事の都合で5月初旬に初めて授業に出席、先生にお目にかかることができ、自己紹介させていただきました。

授業に出席するようになって驚いたのは、ゼミ員の多いことと授業形態が先生はアドバイザー的存在で、学生が中心になり、実地調査(企業調査)をするための基礎知識等を学び、指示された図書(教科書)に基づく研究発表や討議に全員が参加するというものであった。

先生の講義に対する姿勢は、理論だけを知識として吸収しても、実践と理論とを同時に理解しなければ身につかないというものであったと思われまふ。そのような教育方針に基づいてすべてのことに身をもって経験させるため、企業調査、京都旅行、スキー旅行等学生と行動を共にすると同時に、なにごとにも率先して学生を引率され、我々に広い知識を授け、人間社会における最も重要なチームワーク、人間の和等を実践の場から教えてくださいました。

このように行動を共にされ身近な存在であった先生は、我々には教授=研究者というイメージよりもいつでも相談ののってくださる先生というイメージの方が強く残っています。

いまでも私の心に残っていることは、先生に結婚披露宴の席でうかがった子

供についての話である。子供が1人の場合、親は溺愛し、物を自由に与えるため、我儘になりやすい。2人の場合も1人の時と同じように1人1人が自己中心になり独占欲が強くなる。3人になると1人1人が独占欲をもっているが、2対1というグループを形成するようになり、物を分け合ったり妥協するようになる。だから子供は3人以上ほしいものである。……というものであった。先生のお話しに反し、我家は、夫婦と子供2人の標準家庭であるので、子供達の成長する過程を見ていると先生のお話しが実感として伝わってくる。

先生との出会いから今まで、同じ学校に勤めていながら、ブラジル旅行、中国旅行等のお話しを伺うだけで一緒に旅行等に参加するというお付き合いをしていなかったことが大変残念であります。

今年の政経学部の入学試験当日先生のお顔を見ないまま、監督が終り事務室に戻ってくると山岸事務長から中野渡先生が今日の午後2時30分頃逝去された旨連絡をいただいたときは、本当にびっくりするとともに信じきれない気持ちであった。3～4年前からゼミナールOB会の方を担当していたにもかかわらず、何も先生に恩返しできず、突然先生との別れになり、まことに残念であり、今の心境は親孝行したいときに親はなしというものと同じであります。

通夜・葬儀のとき、また6月19日（土）に先生との懐かしい学生時代の思い出の写真の展示、スライド上映、先生独得の中野渡節の講義内容や先生がお歌いになった「措別の歌」のテープを流すなど先生を偲ぶ追悼会に多くのOBの方、教職員、スキー部関係の方々がお集りいただけたのも先生の日頃の温厚な性格の現れではないかと思われました。

先生が日頃から声を大にして話していらした卒業生が気軽に利用できる「中野渡会館」の建設、OB会の存続等残された問題は多くありますが、先生のお教えに基づいて解決できるよう努力していきたいと思います。

中野渡信行先生の御冥福を衷心よりお祈り申し上げます。